

「現代日本の批評」コメント用レジュメ (20170114)

杉田俊介

(0) すばるクリティーク賞のこと

(1) 「現代日本の批評」の(超極私的な)感想

●批評史を作ることは、それ自体がきわめて論争的であり、ある意味で「善き歴史修正」を敢然と実行すること。現代批評のヘゲモニーを握るために、敢然と新たな歴史像を示した。そもそも柄谷・蓮實・浅田・三浦らの『近代日本の批評』の歴史像自体が、従来の批評史を転倒することだった。

●しかし、「ゲンロン」史観における2000年代～2010年代の歴史像は、極めて暗く、悲観的なものにも見える。

佐々木敦氏「ニッポンの文化左翼」は、2010年代のモードを「文化左翼」「賢者本(内田樹的なもの)」「東浩紀的なもの(オタク系・ネットカルチャー系批評)」の三つに分け、2010年代の批評は全く更新されていない、と言う。2000年代の批評はまだ「東浩紀のひとり勝ち」と言えたけれど(それ自体すでにゲームが成り立たないわけだが)、2010年代は誰一人、まともな批評家を生み出していない、と。

結局、みんな文化左翼化した、文化左翼はオタクにすぎない、つまりみんなオタク化した。そこに「批評」はない。ほぼ全否定に近い。

東氏も、2000年代以降の批評を「批評保守(批評空間残党)」「大学化(カルスタ・ポスコロ)」「運動化(ストリートの思想)」「オタク系(+ネットカルチャー)批評」の四つに分け、そのすべてにほぼダメ出し。

●ただし、佐々木氏も東氏も、最後の「オタク系+ネットカルチャー系の批評」(つまり東浩紀的なもの)にかろうじて可能性を見出し、その先に未来のニッポンの「批評」が継承されていく、という可能性に(やや消極的な形であれ)懸けているようだ(正確には「その先にある何か」。観光の哲学?)。東浩紀の劣化コピー多すぎじゃね?という不満はあるみたいだけど……

●こうしたゲンロン史観の中では、僕が好み、かつ属してきた批評の流れは、「ニッポンの文化左翼」「実存的」「ロマン主義」「保守反動」……云々と、散々な嘲笑と罵倒の対象であり、ザコキャラの認定なので……

●ゲンロン史観の敵対者(?)として……

●「保守反動」「批評空間残党」あるいは「ニッポンの文化左翼」「ストリート系」という言い方とは少し違う可能性があるのでは。その辺りのオルタナティブを自分なりに(敢然と)考えてみたい。

●1990年代……批評空間派（柄谷・浅田・蓮実）のヘゲモニー……崩壊した「左」のマインドを空虚かつ無理矢理に延命した

●1990年代後半……ポストオウム（オタクの連合赤軍）の時代……超越性（物語・イデオロギー）なき世界の中でいかに生きるか？……オウムはジャンクなゴミクズ（情報＋サブカル）からカルトな超越性を生み出した……

●村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』の敗北感……オウムの隘路をいかに乗り越えるか……『アンダーグラウンド』『約束された場所で』……森達也問題（……吉本隆明／中沢新一への批判

●1990年代のプレイヤーの中心は、文芸批評家から「社会批評家」へ……宮台真司（終わりなき日常＋啓蒙）／小林よしのり（戦友＋国家主義）／大塚英志（少女の消費者＋民主主義）……現実社会と対峙している、ゆえに、彼らの「個」は独特の分裂を抱えこむ（批評空間派と異なり、彼らの思想の意味はそのテキストだけではわからない）……強さと弱さを同居させたある種の社会的成熟の形を示した……メディアに対する意識（朝生のテレビ／マンガ市場）

●そんな中で引きこもり時代の自分は、社会批評家（宮台／小林／大塚）よりも、「批評空間」の空虚さに魅かれた（と気付いた）。

●1990年代の批評空間的なものは、社会批評を拒絶したが、かといってリベラル左派（カルスタ・ポスコロ）とも異なる……イデオロギーなき時代に敢えてイデオロギー（理念）を信じた、理論的自閉を選択した……社会的引きこもりの時期にすごく批評空間に魅かれ、そこに真理がある気がしていた。

●1990年代後半……「新しい歴史を作る会」的な日本ナショナリズム……明らかにオウムのなものと連続している（現実なき情報＋ジャンク）……オウムにとっての世界宗教（神）とナショナリストにとってのニッポン……しかし、じつはそれは、批評空間派も同じだったのかも！

●加藤典洋『敗戦後論』～『戦後の思考』

●「江藤淳チルドレン」(?)の問題……

●僕個人の学生時代（1993～2000年）＝社会的ひきこもりの時代……ゆえに批評空間の非社会的で空虚なイデオロギーに魅了された……それ自体がまさにポストオウムのなりアリティだったような気がする

●僕個人のフリーター時代（2000年～）……大学院を出て20代半ばでむしろマルクス的な労働・生活の問題（経済的・承認的に何ものでもない、無＝フリーターとしての自分）に直面した……就職氷河期世代……柄谷らのテキストの対象が（遅れて）リアルな現実として襲いかかってきた……それまでのひきこもりのセカイ系的な実存をマジに打ち砕かれた……

●そうした意識と現実（観念と社会）の激しい落差＝ギャップが、自分にとっての批評の生命線になったような気がする

●そうした1990年代／00年代の間のギャップを媒介したのが、僕にとっては鎌田哲哉&山城むつみ（&大澤信亮）の批評だったのかもしれない。彼らは批評空間的な問いを本当に肉体

で「生きた」批評家であるように思える。

- 自分にとって、そのギャップ（空隙）を埋めるものは何だったか。
一つがフリーター論（批評と運動）の流れ。
もう一つが、障害者介護のNPOの流れ（当事者運動／障害者運動／リブ）

個人的には 1995 年以降の「現代思想」の役割は重要（ろう文化、ストリート、だめ連、べてるの家）→生存学的なもの→そこから 1970 年前後の障害者運動・リブへと遡行した。それらをたんなるカルスタ・ポスコロ（笑）では片付けられない。

文芸批評＋障害者介助＋男性問題というトライアングル。

当事者批評／マイノリティ運動の継承・更新……安倍・トランプ時代だからこそ？

（2・1）王道的な「批評と運動」の可能性

- 批評の王道（反動？）……「政治と文学」「批評と運動」の可能性。
- 「小林・柄谷原理主義」？
- 「ドストエフスキーとマルクス」（自己革命と社会革命）という呪い
- 批評運動としての文学界／人民戦線、批評空間／NAM、思想地図／ゲンロンなど。
- たとえば江藤淳の「弱さ」（国家主義に埋没できないねじれ）……保守思想家ではなく批評家だったことの意味

●ポスト 1995 年（オウム事件、Windows95、新時代の日本的経営）としての……2000 年代の同時多発的なメディア創刊運動……「重力」「新現実」「波状言論」「思想地図」「vol」「フリーターズフリー」「ロスジェネ」「posse」「αシノドス」等。

●ゲンロンの共同討議では、ロスジェネ的なものは「実存派」「ロマン主義」「セカイ系」と批判される。半分は賛成。半分は異議を言いたい。

●セカイ系的ロマン的実存……たとえばそもそも、二〇〇〇年代後半のロスジェネ論壇では、中間項としての社会の領域が大事にされてきたのでは。（セカイ系→シャカイ系？）

●とはいえ、他方で、リベラル・ソーシャルな改良主義「だけ」でもつまらない。その辺の微妙さ。

●1990 年代的批評空間→ロマン的セカイ系的実存……しかし、「文芸批評家」（テキスト論）でもなく「社会批評家」でもない（なれない）からこそ、ある種の人々は「批評」に魅かれるのかもしれない。

●すると、そこには「ニッポンの文化左翼」「ストリート系」とは違う可能性もあったのでは？

強引に区別すれば、「アナキスト／ストリート／デモ」の論理と「批評（的）運動／当事者運動」の論理とは微妙に異なるのでは。

ストリートの思想→現場と言葉の間にあまりズレ（分裂）がない。リア充的（たとえば佐々

木中や栗原康)。

批評(的)運動……「現場」と「理論」の分裂的な緊張。現場と日常の往還(解離)がつねに付きまとう。なぜなら、個体的な身体(存在)を消せないから。デモや路上から帰れば貧困だったり、非モテだったり、家族関係に悩まされたり。

●そもそも『一般意志2.0』『弱いつながり』『ゲンロン0』もそうなのでは?……集団・運動(ゲンロン)と理論(テキスト)の間の相互作用の産物なのでは。(『共産党宣言』も本来は無名のテキストだった、とか)

●共同討議1のラスト:福嶋亮大氏の問い。1970年代までの階級的思想が喪われた。今後復活するのでは。その微妙なすれ違い。福嶋氏は現代的な浪漫派/京都学派的な資質の人だと思いが、なぜ階級の話をするのか。

●マルクス主義とも異なる「左」的な労働思想(経済学批判)が必要なんだろう。近代経済学的な洗練とは異なる労働原理にもとづくもの。

●すばるクリティーク賞……「政治と文学」「批評と運動」がモチーフの人間が選考委員(かなり温度差があるけど)……すると、それを今後の批評運動として。

(2・2) 当事者批評/生存運動的なものの可能性

●杉田の個人的関心……〈70年〉的なもの……文芸批評(内向の世代としての柄谷行人)+障害者運動(健全者文明の批判者としての横塚晃一)+男性問題(ウーマンリブとしての田中美津)……自己批評と社会批評が同時に行われる

●当事者運動(70年前後)→当事者主権(80年代)→社会的企業や当事者研究(現在)

1970年前後……(新左翼批判としての)マイノリティ運動=ラディカリズムの時代……自己変革+社会変革

1990年代……ポストモダン・マイノリティの時代(マイノリティ性の個別化・多元化・複合化)……文化批評/ポストコロニアリズム

2000年代後半~現代……(新しい形での)「当事者」の時代?……「当事者」という概念の重層性(当事者憑依でもなく、当事者排斥でもなく)……マイノリティの問題をマジョリティの立ち位置からあらためて問い直し、更新すること……マジョリティとマイノリティのキメラ的身体

●杉田における当事者批評……(a)フリーター運動(中流層でもプロレタリアでもなく)、(b)男性批評(マッチョでもマイノリティでもなく)

●一例として:立命館大学の「生存学」という拠点……立岩真也(現代の柳田国男のような感じ?)……巨大なデータベース(「青い芝」「優生学」などの関連する言葉を検索すれば必ずヒットするはず)……哲学者(小泉義之、千葉雅也)(森岡正博の生命学など)……「批評と運動」の文脈ではあまり扱われない育児・ケア・家族・生命倫理などの問題系に対峙

●「ロスジェネの水子たち」……「批評と運動」の流れを、それらの当事者運動／生存学的な文脈と媒介するということ（生存運動としてのフリーター運動など）。

●そういう目で見えていくと……

1990年代以降の文化批評・ポストコロニアル批評（『現代思想』誌の役割）、「生存学」的な障害病異のマイノリティ批評の蓄積（70年代前後の障害者運動やウーマンリブの再発見と更新）、2000年代後半の格差・貧困・フリーター論壇、NAM「重力」「ロスジェネ」「フリーターズフリー」の系譜、近年のたとえばてるの家・ダルク女性ハウス・熊谷晋一郎・綾屋沙月・川口有美子・千葉雅也・國分功一郎・ドゥルーズ・マラブーらの仕事が象徴するようないわば「マイノリティ批評＝運動2・0（3・0?）」の系譜、等等。

この辺の流れを何と呼べばいいのか→??（まだよくわかりません）